

平成 18 年度
三浦半島タイワンリス生息状況調査
概要版

平成 19 年 3 月

株式会社 応用生物

はじめに

近年、神奈川県において、特定外来生物のタイワンリスが分布を拡大しており、在来生態系への影響や農作物に対する被害の増大が懸念されている。

この調査はこれまで詳細な情報がなかった三浦半島におけるタイワンリスの生息状況ならびに自然植生に対する影響、農業・生活被害の実態などを明らかにして今後のタイワンリス対策に役立てることを目的に行ったものである。

なお、本調査は神奈川県横須賀三浦地域県政総合センターの委託を受け、株式会社応用生物が実施した。

目次

はじめに

1. 調査対象地域.....	1
2. 調査内容と方法.....	1
3. 調査期間.....	1
4. 地域概況.....	3
1) 気象.....	3
2) 地質・地形.....	3
3) 土壌.....	3
4) 植生・土地利用.....	3
5. 調査結果および考察.....	4
1) ラインセンサスの結果.....	4
(1) タイワンリスの確認状況.....	4
(2) 出現位置.....	4
2) 生息数と生息密度.....	4
(1) 生息数.....	4
(2) 生息密度.....	4
3) 三浦半島におけるタイワンリスの分布状況.....	13
4) 樹皮剥ぎ調査の結果.....	16
(1) 樹皮剥ぎ対象樹種.....	16
(2) 地区別樹皮剥ぎ状況.....	18
(3) 樹皮剥ぎの形態と樹種.....	20
(4) 樹皮剥ぎ樹木の太さ.....	21
(5) 樹皮剥ぎによる植生環境への影響.....	21
5) 農業・生活被害の状況.....	22
6. まとめ.....	27

1. 調査対象地域

三浦半島における5つの首都圏近郊緑地保全区域を対象に調査を実施した(図1)。

2. 調査内容と方法

資料の分析、聞き取り調査、現地調査を行った。現地調査ではタイワンリスの分布、密度を明らかにするためのラインセンサス、樹皮剥ぎ調査、ラインセンサスルート沿いの植生・土地利用調査などを実施した。

ラインセンサスは次の条件下で行った(表1参照)。

- 歩行速度 : 時速1~2km程度とした。
- 観察幅 : 片側約25m、両側約50mを目安に記録した。
- 観察時間帯 : 原則として午前中の時間帯に行った調査をセンサス記録として採用した。
- 観察事項 : 目視、声による直接観察のほか食痕、樹皮剥ぎ、巣など本種のフィールドサイン全般を観察対象とした。
- 観察回数 : 各ルート3回を原則としたが、第1回目の調査で出現記録が得られなかったIV、Vのルートについては2回とした。
- 天候 : タイワンリスの活動、ならびに調査記録は強風、雨などの気象条件に左右されることから、調査状況が悪かった場合は後日、再調査を行うといった方法をとった。

樹皮剥ぎ調査は、現地踏査によって樹皮剥ぎ箇所数(本数、株立ちは1本とした)、樹種、胸高直径、樹皮剥ぎの形態(線的、面的)を記録した。落葉中の同定は冬芽、樹皮、樹形、落葉などから行った。

表1 各緑地の面積とラインセンサスのルート数

地区	地区の名称	面積	ルート数
I	逗子・葉山近郊緑地保全区域	1,087ha	11
II	衣笠・大楠山近郊緑地保全区域	958ha	10
III	武山近郊緑地保全区域	327ha	5
IV	小網代近郊緑地保全区域	70ha	1
V	剣崎・岩堂山近郊緑地保全区域	618ha	6

3. 調査期間

現地調査は平成18年12月から平成19年3月の間に行った。

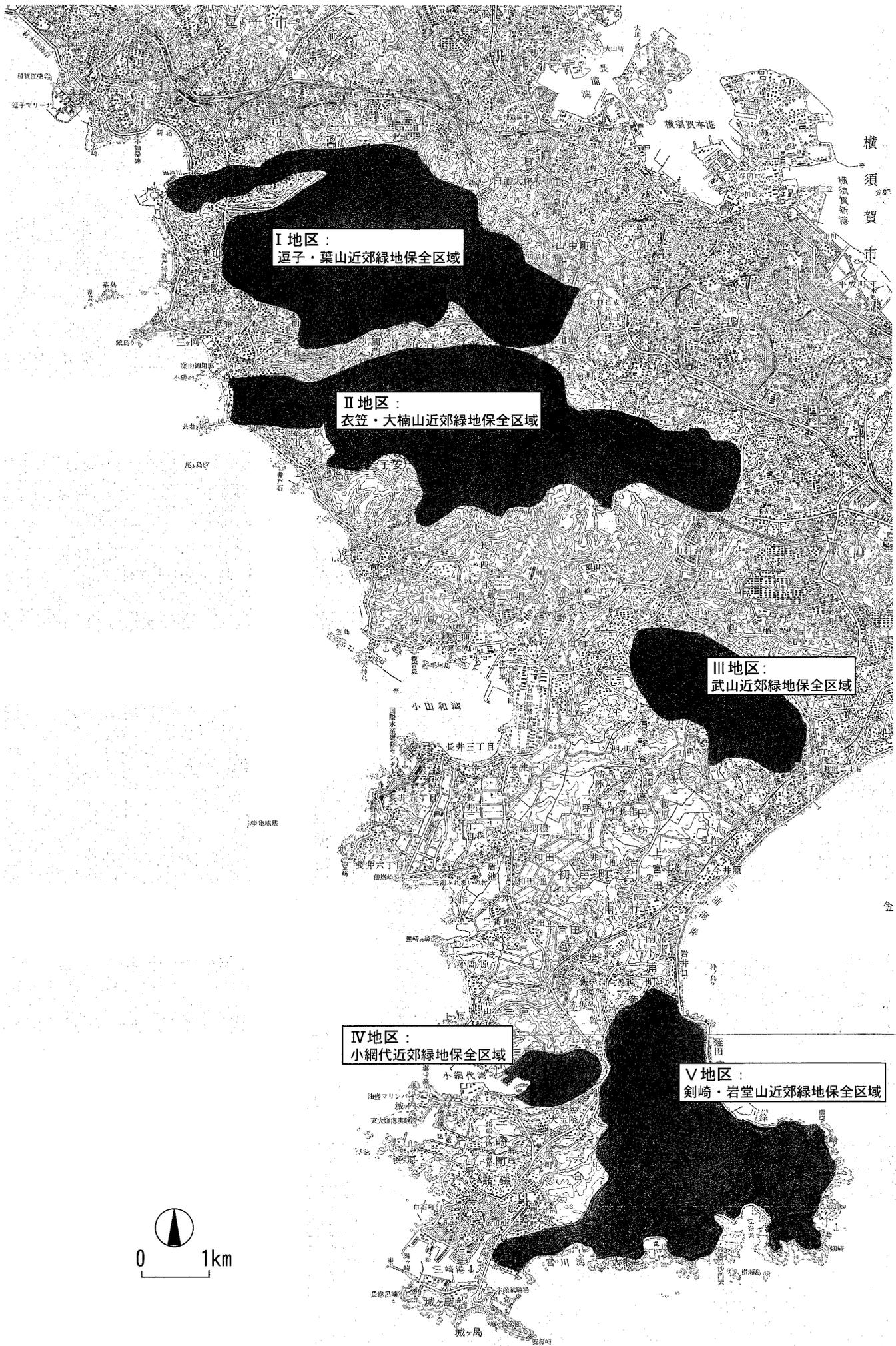


図1. 調査対象地域

4. 地域概況

1) 気象

三浦半島の気象は温暖（平均 15.6℃）で、梅雨時と 9 月の台風時に降水量が多くなる（1548mm）典型的な太平洋側気候を示す(図 2)。

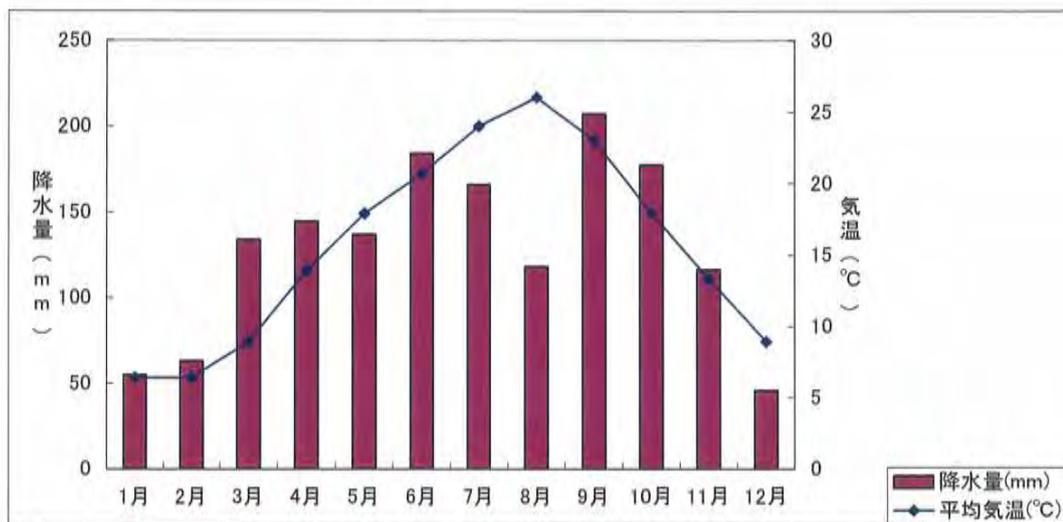


図 2 三浦市月別平均気温と降水量(1979～2000 年)

2) 地質・地形

新三紀の堆積岩（砂岩、泥岩、凝灰岩互層）を基盤に、半島南部の小田和湾から三浦海岸にかけては洪積世のローム層が分布する。地形は新三紀の堆積岩部は小起伏山地～丘陵地となり、南部の洪積ローム層部は平坦な台地となっている。標高は半島中央部の大楠山が 241.3m で最も高く、南部に向かって低くなる。また、半島南端はリアス式海岸が発達する。

3) 土壌

土壌は、小起伏山地、丘陵地では褐色森林土壌（やや乾燥）、ローム台地は火山灰起源の黒ボク土壌、低地は灰色低地土壌などが分布する。森林土壌の生産性はやや乾性で全般に高くない。

4) 植生・土地利用

三浦半島の樹林の大半は広葉樹二次林や植林が占め、自然植生は社寺林や海岸周辺の特立地（崖地、砂丘）などにわずかに見られる程度である。なお、山部はやや乾燥気味のため、広葉樹二次林が優占し、植林地は沢部など肥沃地に限られ、少ない。台地の火山灰層（黒ボク土壌）では三浦ダイコンが有名である。

5. 調査結果および考察

1) ラインセンサスの結果

(1) タイワンリスの確認状況

調査の結果、タイワンリスは逗子・葉山（Ⅰ地区）、衣笠・大楠山（Ⅱ地区）、武山（Ⅲ地区）で記録され、小網代（Ⅳ地区）、剣崎・岩堂山（Ⅴ地区）では記録されなかった（表 2、図 3）。Ⅰ地区では、3 調査期の合計が 138 頭、同じくⅡ地区 144 頭、Ⅲ地区 7 頭であった。

月別の出現個体数推移では 12 月に最も多く、1 月、2-3 月と順次数を減ずる傾向が見られた。この傾向は全体的に数の多いⅠ地区、Ⅱ地区に共通する。

(2) 出現位置

各ルート of 植生・土地利用と 3 調査期総合の出現位置の関係を見ると、Ⅰ地区では全体に常落広葉樹混交林の記録が多く、Ⅱ地区で常落広葉樹混交林、落葉広葉樹林のほか、スギ・ヒノキ植林、畑など多様な植生がモザイク状に分布するルートでも出現記録が多かった。Ⅲ地区では常緑広葉樹林での記録が目立った。タイワンリスの出現が見られなかったⅣ、Ⅴ地区の植生はⅠ～Ⅲ地区とは異なり、まとまった常緑広葉樹林はなかった（図 4～図 7）。

2) 生息数と生息密度

12 月～3 月期のラインセンサスによる調査結果から生息数、生息密度を推定し、以下に示した。ここではラインセンサスに利用した山道や農道沿い（いずれも林縁）と林内におけるタイワンリスの行動様式の違い、あるいは季節による出現傾向の違いなど未解明の要件が多く残されている。従って、本調査で示された推定生息数、密度は限られた条件の中で行われた 1 試算として理解する必要がある。

(1) 生息数

タイワンリスの観察実数と観察幅（面積）、対象緑地面積から生息数を推定した結果、Ⅰ地区 1110 頭（12 月：3 調査期のうちの最大値）、Ⅱ地区 1275 頭（12 月）、Ⅲ地区 55 頭（2-3 月）であった（表 3、図 8）。タイワンリスの生息が確認された 3 緑地（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区）の合計は、12 月が 2385 頭、3 期平均が 1771 頭となった。

(2) 生息密度

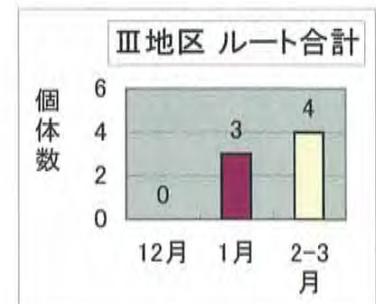
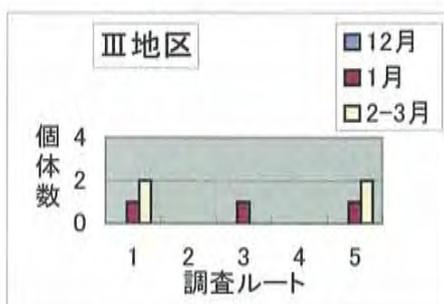
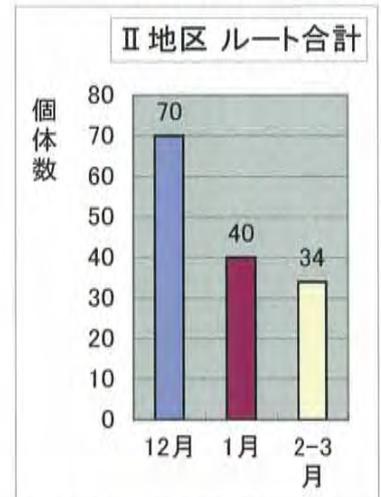
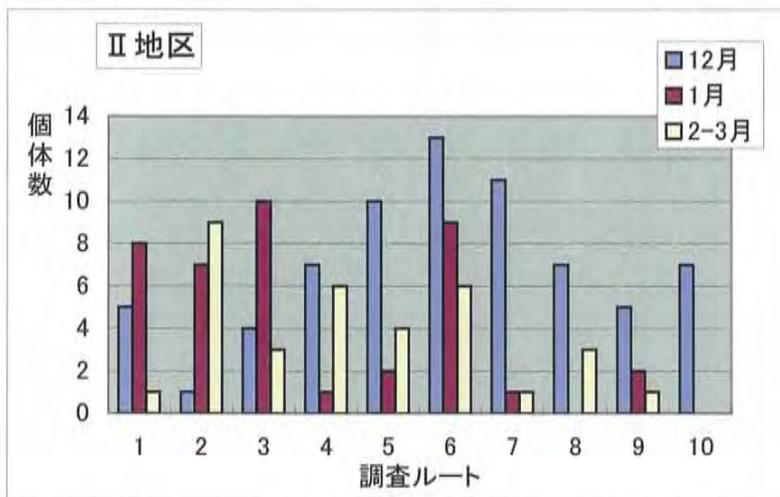
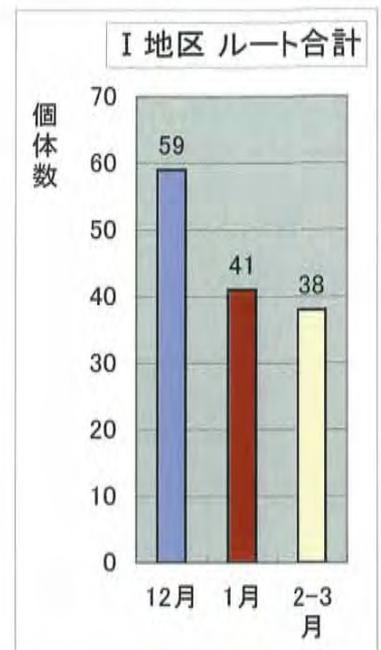
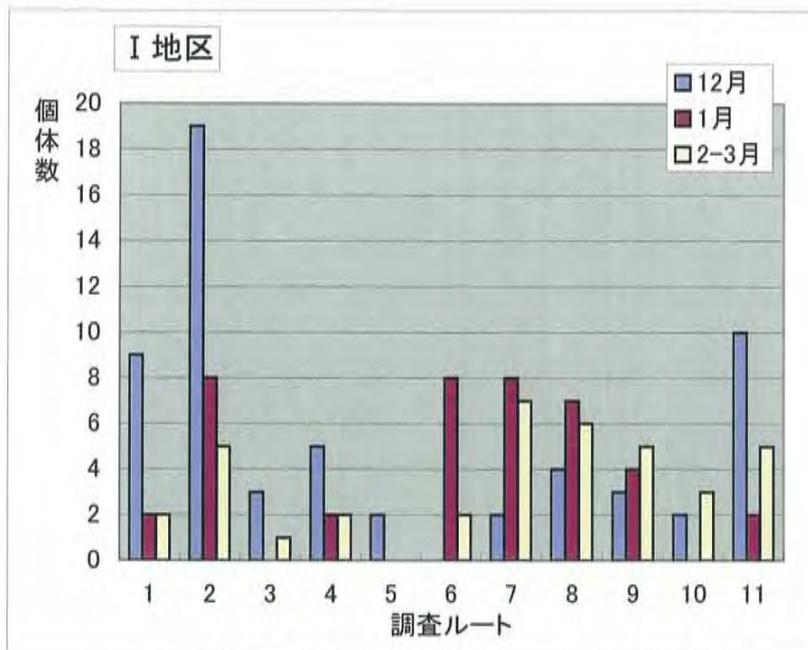
タイワンリスの生息が見られたⅠ・Ⅱ・Ⅲ地区の生息密度は 3 調査期の平均でⅠ地区 0.80/ha、Ⅱ地区 0.91/ha、Ⅲ地区 0.10/ha、最多月（Ⅰ・Ⅱ地区は 12 月、Ⅲ地区は 2-3 月）では、Ⅰ地区 1.02/ha、Ⅱ地区 1.33/ha、Ⅲ地区 0.17/ha であった（表 3、図 9）。

* 生息数（推定値）の計算式

タイワンリスの推定生息数 = 確認個体数（頭） / 調査面積（ha） × 緑地全体面積（ha）

表2 ライセンスにおける台湾リスの確認状況

地区	ルート No.	12月			1月			2-3月			総計
		目視	声	計	目視	声	計	目視	声	計	
I	1	8	1	9	2		2	2		2	13
	2	17	2	19	6	2	8	5		5	32
	3	3		3			0	1		1	4
	4	5		5	2		2	2		2	9
	5	2		2			0			0	2
	6			0	8		8	2		2	10
	7	2		2	8		8	7		7	17
	8	4		4	6	1	7	4	2	6	17
	9	3		3	4		4	5		5	12
	10	1	1	2			0	3		3	5
	11	9	1	10	2		2	5		5	17
	計		54	5	59	38	3	41	36	2	38
II	1	4	1	5	7	1	8	1		1	14
	2	1		1	7		7	2	7	9	17
	3	4		4	8	2	10	3		3	17
	4	7		7	1		1	6		6	14
	5	9	1	10	2		2	4		4	16
	6	11	2	13	8	1	9	6		6	28
	7	9	2	11	1		1	1		1	13
	8	6	1	7			0	3		3	10
	9	5		5	2		2	1		1	8
	10	5	2	7			0			0	7
	計		61	9	70	36	4	40	27	7	34
III	1			0	1		1	2		2	3
	2			0			0			0	0
	3			0	1		1			0	1
	4			0			0			0	0
	5			0	1		1	1	1	2	3
	計		0	0	0	3	0	3	3	1	4
IV	1			0			0			0	0
	計		0	0	0	0	0	0	0	0	0
V	1			0			0			0	0
	2			0			0			0	0
	3			0			0			0	0
	4			0			0			0	0
	5			0			0			0	0
	6			0			0			0	0
	計		0	0	0	0	0	0	0	0	0
総計		115	14	129	77	7	84	66	10	76	289



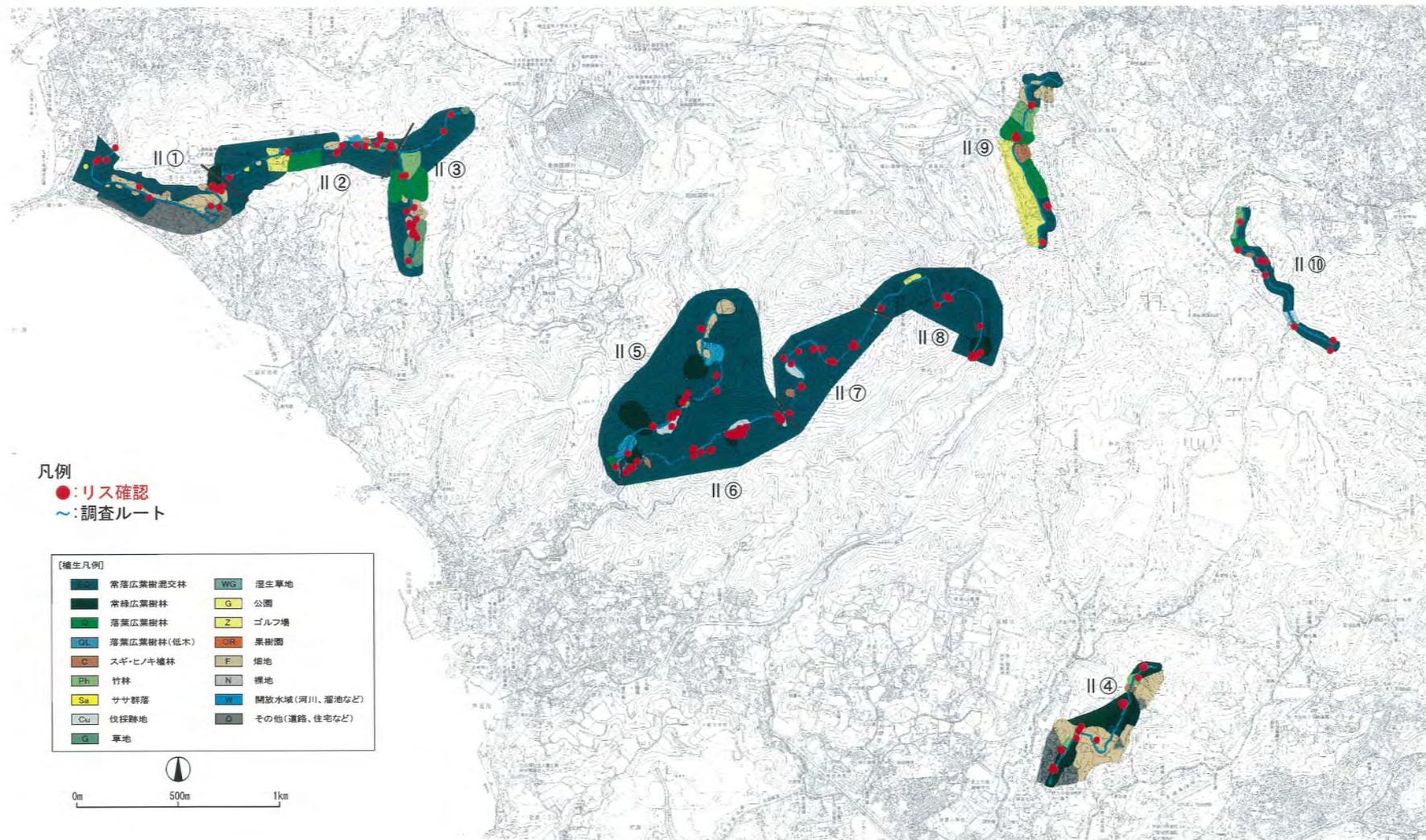
* 個体数は目視と声の合計
 * IV・V 地区ではセンサス中の出現記録は得られなかった

図3 ラインセンサスにおける台湾リスの確認状況



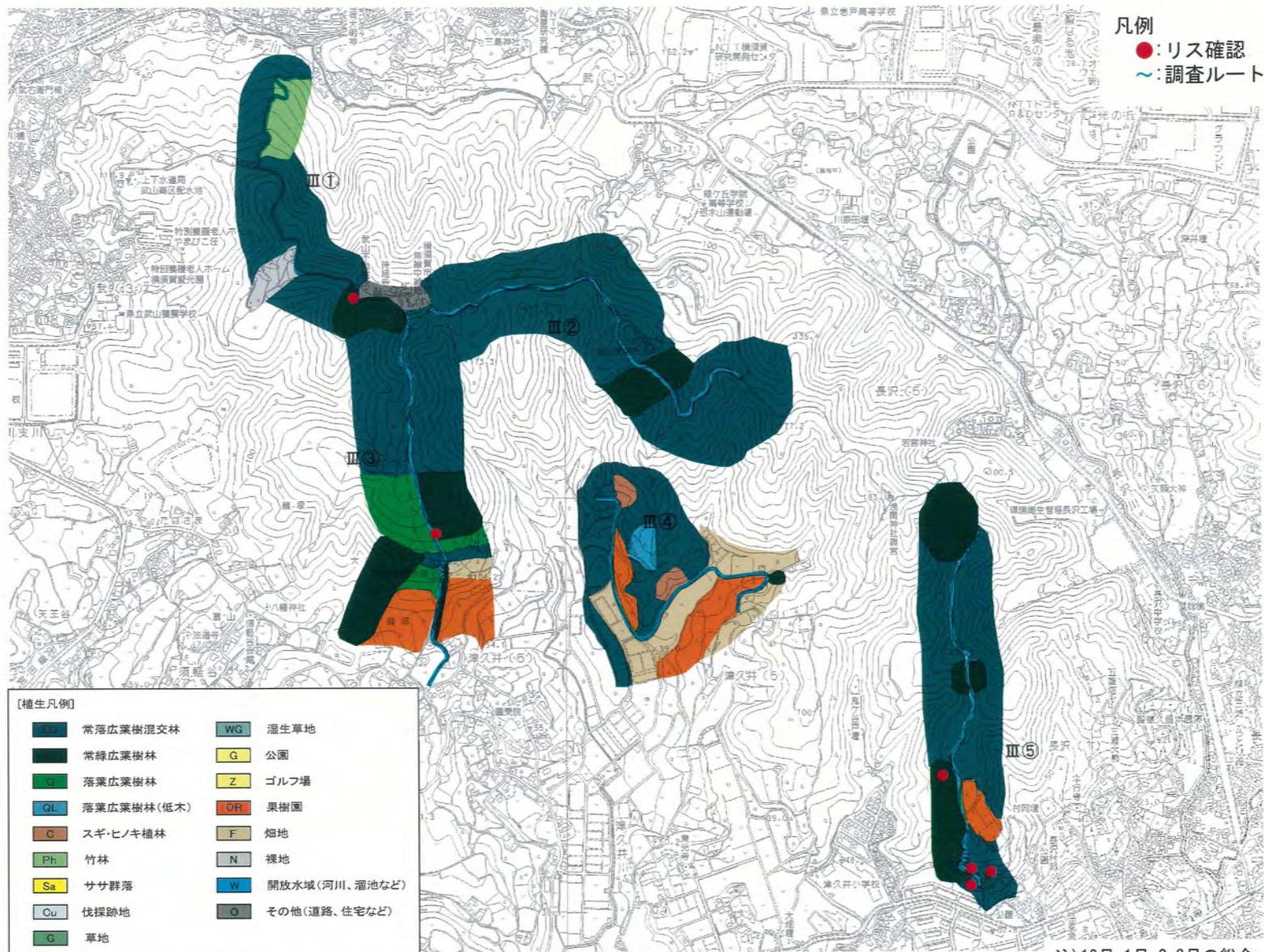
図4 ラインセンサスルート沿いの植生・土地利用と台湾リスの出現位置(I地区)

注)12月,1月,2-3月の総合



注)12月,1月,2・3月の総合

図5 ラインセンサスルート沿いの植生・土地利用と台湾リスの出現位置(Ⅱ地区)



注)12月,1月,2・3月の総合

図6 ラインセンサルート沿いの植生・土地利用と台湾ワシリスの出現位置(Ⅲ地区)

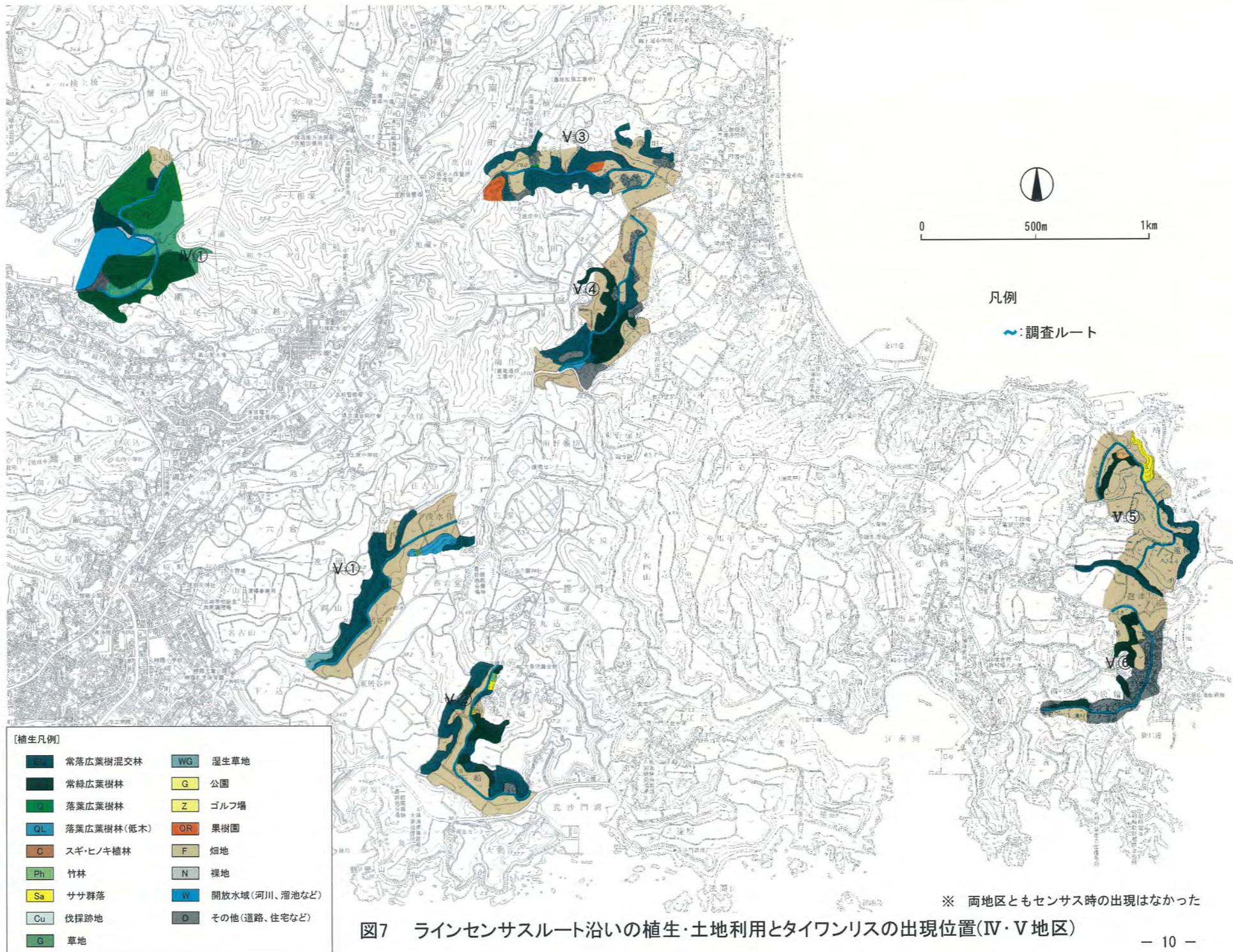


図7 ラインセンサスルート沿いの植生・土地利用とタイワンリスの出現位置(IV・V地区)

表3 三浦半島におけるタイワンリスの生息個体数推定

●調査地域

地区	調査対象緑地の名称	調査対象緑地の総面積(ha)	センサスルート数	センサスルートの総距離(m)
I	逗子・葉山近郊緑地保全区域	1087	11	11560
II	衣笠・大楠山近郊緑地保全区域	958	10	10520
III	武山近郊緑地保全区域	327	5	4780
IV	小網代近郊緑地保全区域	70	1	980
V	剣崎・岩堂山近郊緑地保全区域	618	6	5900
合計	-	3060	33	33740
3地区合計	I・II・III地区の合計	2372	26	26860

注)センサスルートの距離は地図(1万分の1)上で測定した。

●観察実数(センサスの記録)

地区	タイワンリスの期別出現個体数			3期平均	3期合計	最多月 ^(*)4) の出現個体数
	12月	1月	2月-3月			
I	59	41	38	46.0	138	59
II	70	40	34	48.0	144	70
III	0	3	4	2.3	7	4
IV	0	-	0	0	0	0
V	0	-	0	0	0	0
合計	129	84	76	96.3	289	133

注)1月期はIV地区、V地区では定性的な調査を実施した。

●個体数推定の条件設定

地区	観察幅=50m	
	センサスにおける観察面積(ha) ^(*)1)	全域(近郊緑地保全区域)に占める観察面積の割合
I	57.8	5.3%
II	52.6	5.5%
III	23.9	7.3%
IV	4.9	7.0%
V	29.5	4.8%
合計	168.7	5.5%
3地区合計	134.3	5.7%

●推定個体数(条件:観察幅50m:センサス1km当たりの観察面積=5ha)

地区	タイワンリスの総個体数(推定値) ^(*)2)				3期平均個体数/ha ^(*)3)	最多月 ^(*)4) の総個体数	最多月 ^(*)4) の個体数/ha
	12月	1月	2月-3月	3期平均			
I	1110	771	715	865	0.80	1110	1.02
II	1275	729	619	874	0.91	1275	1.33
III	0	41	55	32	0.10	55	0.17
3地区合計	2385	1541	1389	1771	-	2440	-

(*)1: センサスにおける観察面積(ha)=センサスルートの総距離(m)×センサスの観察幅(m)÷10000

(*)2: タイワンリスの総個体数(推定値)

$$\text{タイワンリスの総個体数(推定値)} = \frac{\text{調査対象緑地面積(ha)} \times \text{出現個体数(センサスの記録)} \times 10000}{\text{ラインセンサスルートの総距離(m)} \times \text{観察幅(m)}}$$

(*)3: 3期平均個体数/ha=タイワンリスの個体数(推定値)/調査対象緑地の総面積(ha)

(*)4: 最多月:12月、1月、2月-3月の3期のうち、出現個体数の記録が最も多かった月。

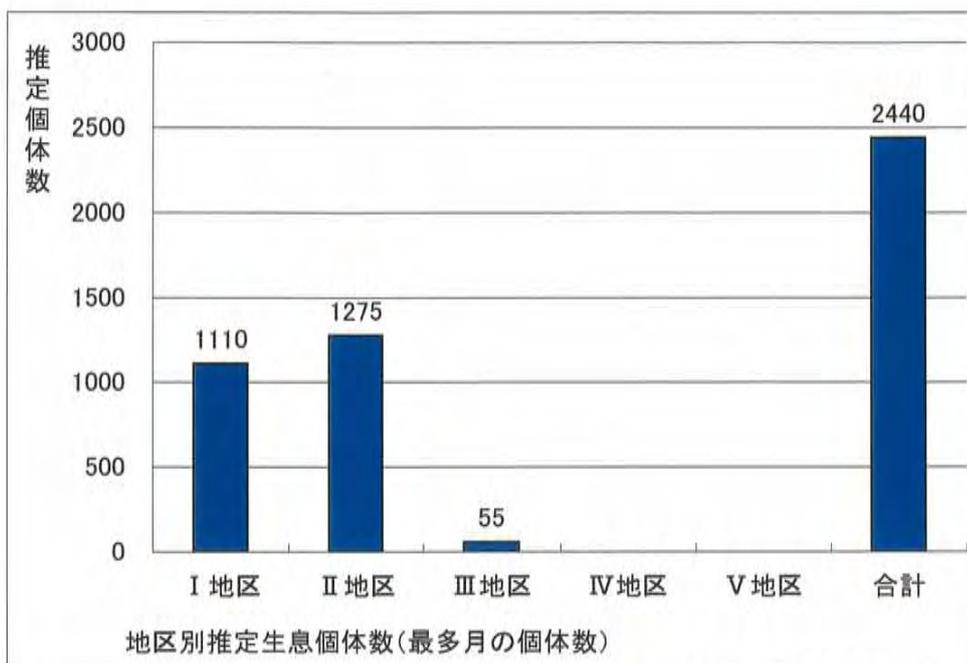


図8 三浦半島における台湾リスの生息個体数推定

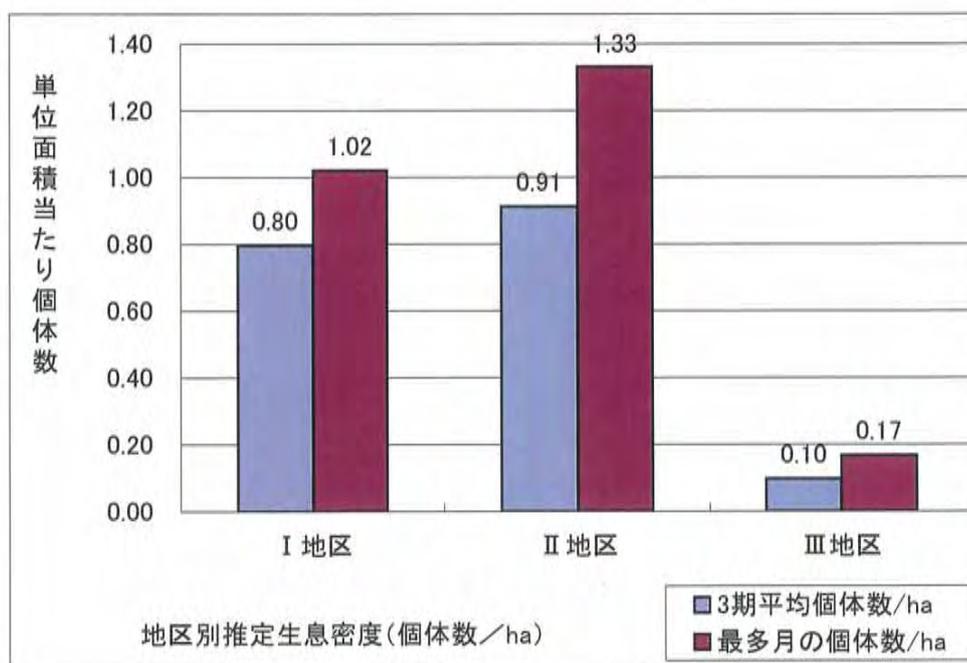


図9 三浦半島における台湾リスの生息密度推定

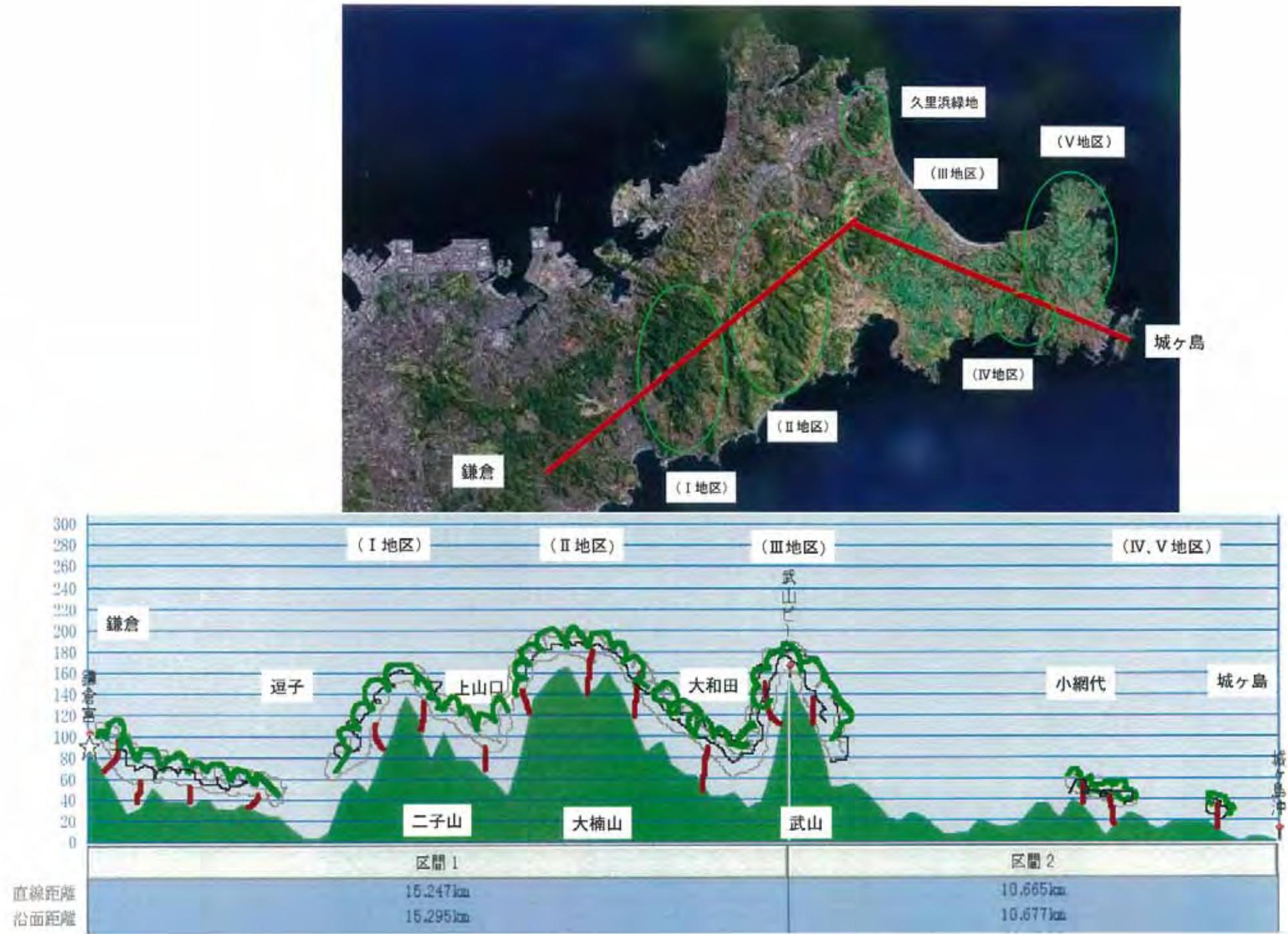


図10 調査対象地域(I地区～V地区)の断面模式

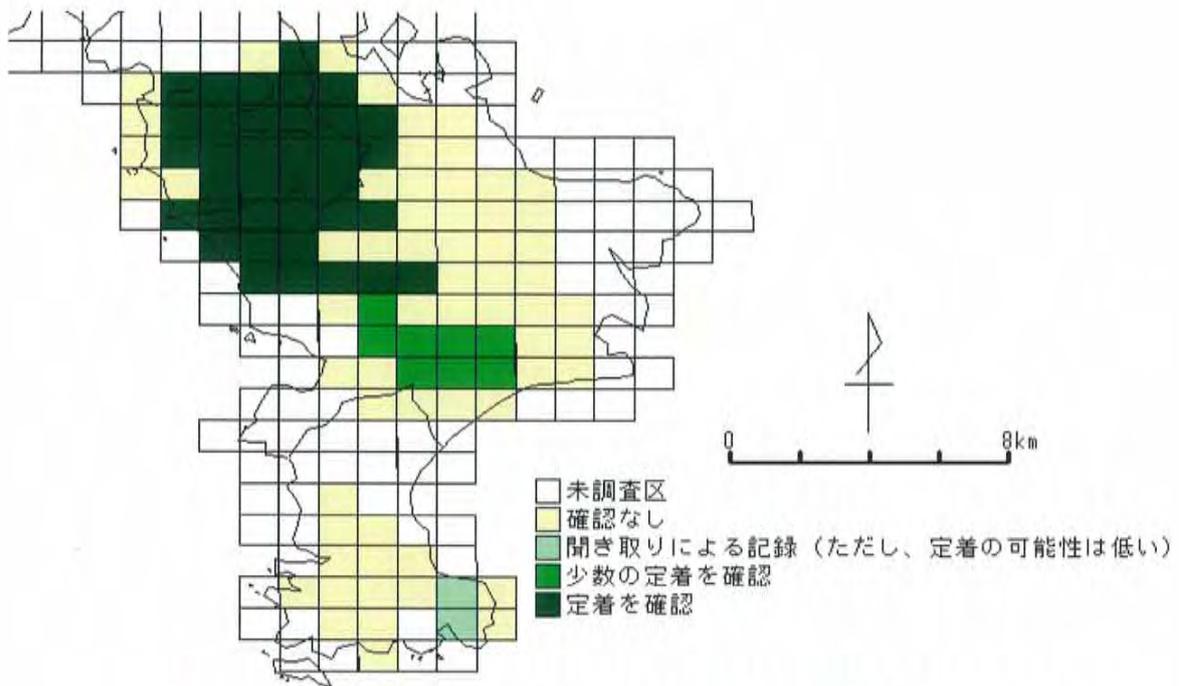


図11 三浦半島における台湾リスの分布状況(2007年3月)

注1) 三浦市については本調査の中で見たという聞き取り情報があったほか、既存資料によっても分布が記録された経緯がある。ただし、定着の可能性は低いものと考えられる。

注2) 生息分布情報は地理情報システム(GIS)により標準地域メッシュごとに集計した。標準地域メッシュは、国土地理院発行の1/25000地形図の図郭を縦横それぞれ得られる緯度30"×経度45"の方形の区画で、面積はおおよそ1×1kmである。

4) 樹皮剥ぎ調査の結果

調査の結果、樹皮剥ぎに関する多くの知見が明らかになった。調査位置を図12に示した。

(1) 樹皮剥ぎ対象樹種

樹皮剥ぎ痕のあった樹木はⅠ・Ⅱ・Ⅲ地区で見られ、合計22種306本であった。タブノキ、ケヤキ、シロダモに多く、次いでハゼノキ(リュウキュウハゼ)、カラスザンショウ、ミズキ、エノキとなった(図13)。樹皮剥ぎは基本的に落葉・常緑広葉樹の樹皮下の形成層を齧っている(写真1)。スギの樹皮剥ぎも認められるが、表層を剥皮して巢材に利用している(写真2)。



写真1 形成層が齧られたハゼノキ(摂食)

写真2 スギの樹皮剥ぎ(巢材)

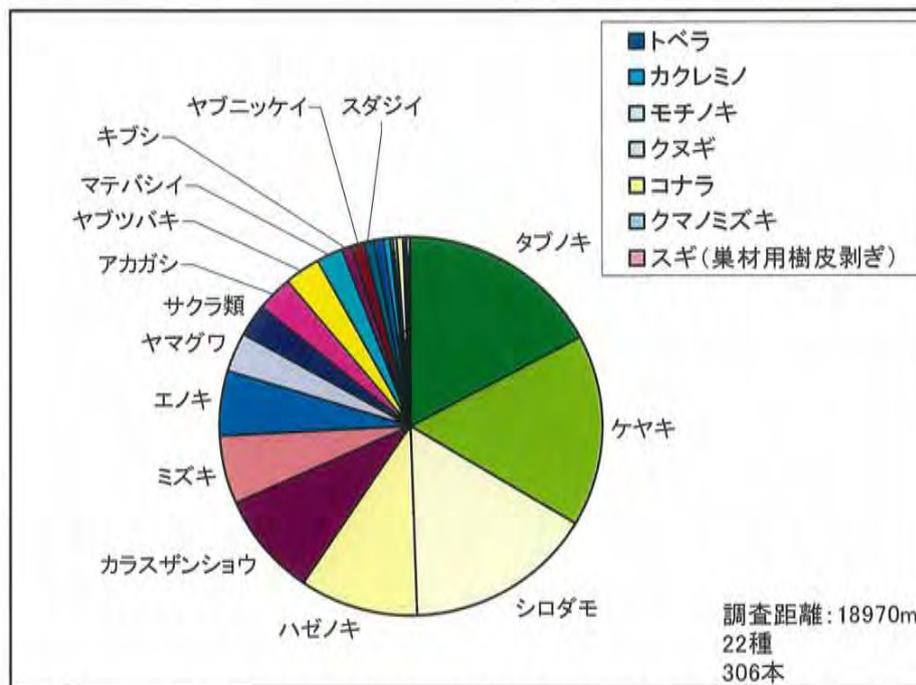


図13 タイワンリスによる樹皮剥ぎ樹種の割合(対象木:306本)

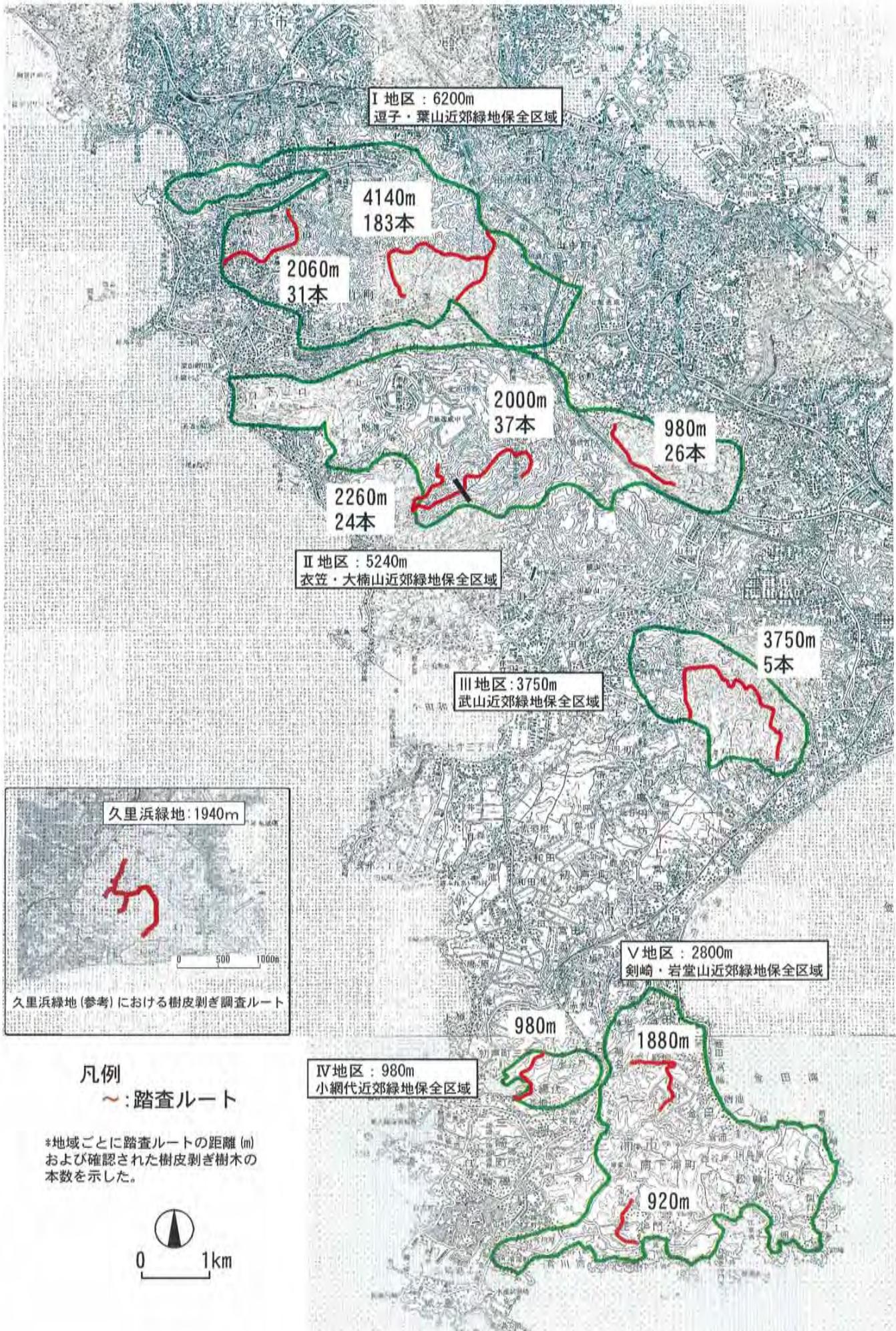


図12 樹皮剥ぎ調査の踏査位置

(2) 地区別樹皮剥ぎ状況

樹皮剥ぎはⅠ地区で最も多く(34.5本/km)、次いでⅡ地区(16.6本/km)、Ⅲ地区(1.3本/km)であった。これらの結果は各地区におけるタイワンリスの定着年数と対応した。(表5、図14)。また、樹皮剥ぎの対象になった樹木の種類数は、Ⅰ地区が21種、Ⅱ地区は11種、Ⅲ地区は3種で(図15~17)、この結果にも各地区におけるタイワンリスの定着の年数との関係が示唆された。

表5 地区別樹皮剥ぎ密度

地区	調査延長距離(m)	本数	本/km	タイワンリスの分布定着推定年
Ⅰ	6200	214	34.5	1997年
Ⅱ	5240	87	16.6	2001年
Ⅲ	3750	5	1.3	2004年
Ⅳ	980	0	0	—
Ⅴ	2800	0	0	—
合計	18970	306	—	—
久里浜緑地	1940	0	0	(参考)

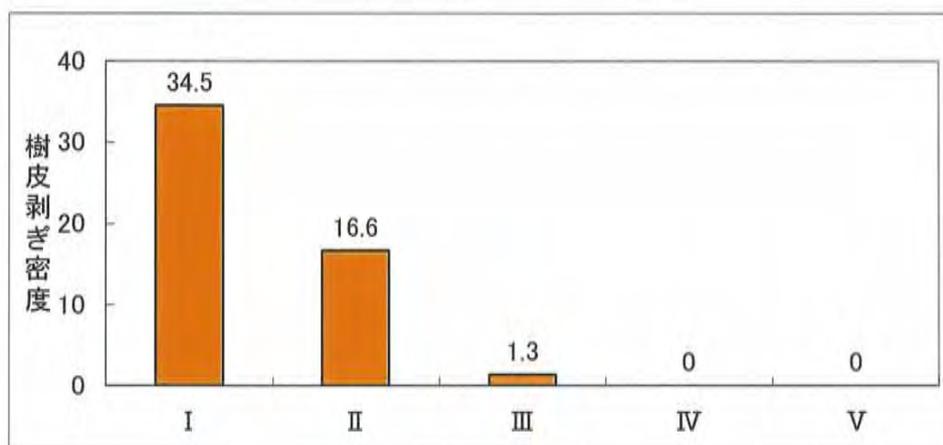


図14 地区別樹皮剥ぎ密度

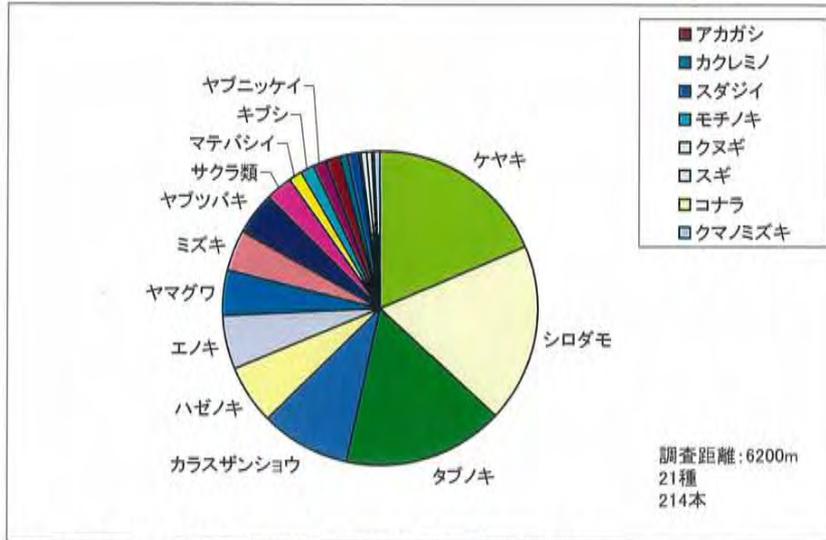


図15 タイワンリスによる樹皮剥ぎ樹種の割合 (I 地区)

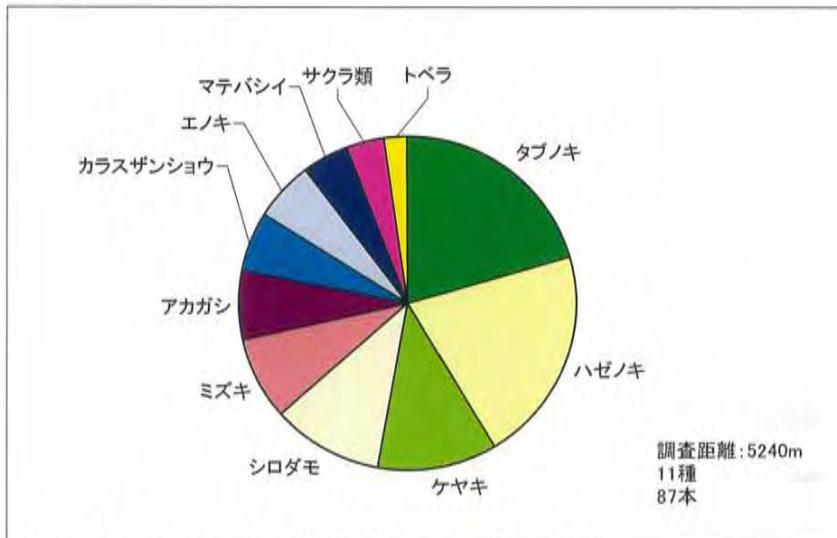


図16 タイワンリスによる樹皮剥ぎ樹種の割合 (II 地区)

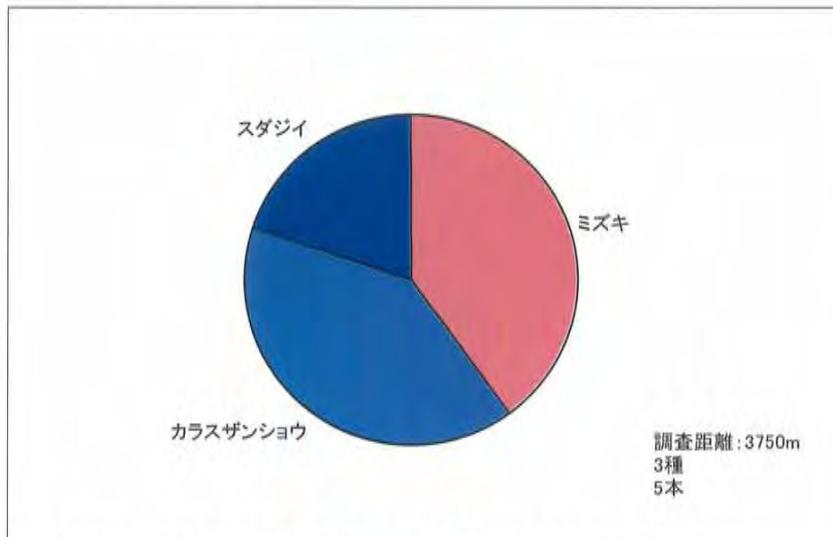


図17 タイワンリスによる樹皮剥ぎ樹種の割合 (III 地区)

(3) 樹皮剥ぎの形態と樹種

タイワンリスによる樹皮剥ぎには樹皮を面的に剥皮するもの(写真3)と、線状に剥皮するもの(写真4)とが見られ、樹種のタイプによって樹皮剥ぎパターンの異なることが分かった。今回調査した結果(306本)では、落葉広葉樹(ケヤキ、ハゼノキ、カラスザンショウなど)には面的な樹皮剥ぎが多く、常緑広葉樹(タブノキ、シロダモなど)は線の樹皮剥ぎが多い傾向が見られた(表6、図18)。面的樹皮剥ぎは枯死する場合が多く、特にカラスザンショウで枯死例が比較的多く見られた。樹皮成分の違いと樹皮剥ぎ発生との関係などは今後の解明課題である。

表6 樹種別樹皮剥ぎ形態の違い

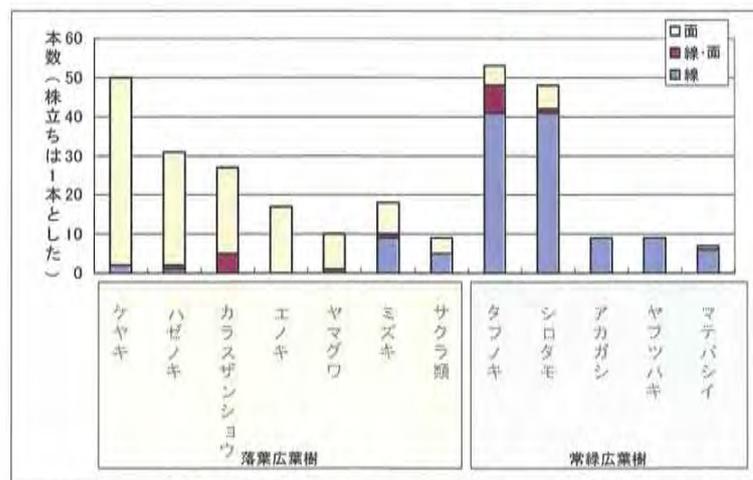
樹種	樹皮剥ぎ形態(本数)			計
	面	線・面	線	
ケヤキ	48	0	2	50
ハゼノキ	29	1	1	31
カラスザンショウ	22	5	0	27
エノキ	17			17
ヤマグワ	9	1		10
ミズキ	8	1	9	18
サクラ類	4		5	9
タブノキ	5	7	41	53
シロダモ	6	1	41	48
アカガシ			9	9
ヤブツバキ			9	9
マテバシイ	1		6	7
キブシ			3	3
ヤブニッケイ			3	3
スダジイ	1		2	3
トベラ	2			2
カクレミノ	2			2
モチノキ			1	1
クヌギ	1			1
スギ	1			1
コナラ	1			1
クマノミズキ			1	1



写真3 面的樹皮剥ぎ(ハゼノキ)



写真4 線的樹皮剥ぎ(ヤブニッケイ)



落葉広葉樹は面的樹皮剥ぎが多く、常緑広葉樹は線の樹皮剥ぎが多い傾向が見られる。

図18 樹種別樹皮剥ぎ形態の違い(観察本数7本以上を対象とした)

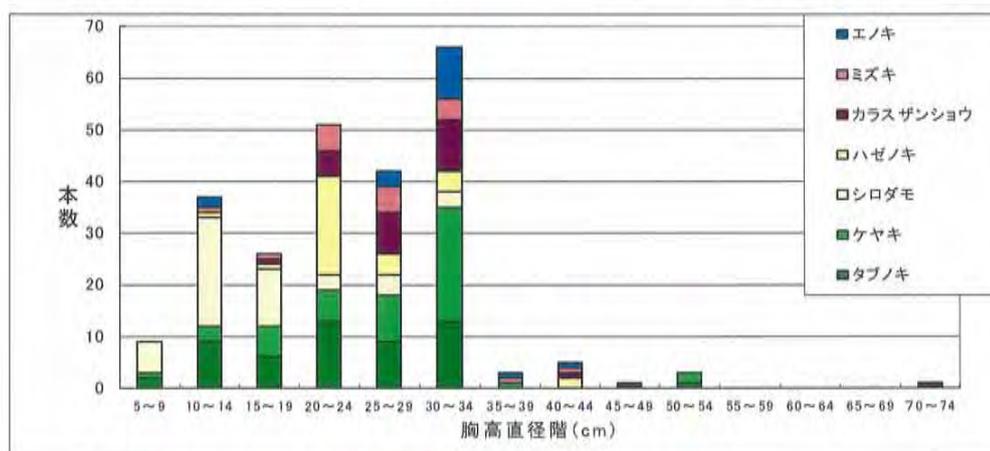
(4) 樹皮剥ぎ樹木の太さ

樹皮剥ぎを受けた樹木の胸高直径は20~30cmのものが多く、最も太いものはカラスザンショウの70cmであった。ケヤキ、カラスザンショウ、エノキに比較的太いものが多くなっている(表7、図19)。

これらの結果にも各樹種に対する台湾リスの嗜好が関係するものと思われるが、それらの解明は今後の課題である。

表7 タイワンリスによる樹皮剥ぎ主要樹木の樹種別胸高直径階別本数

胸高直径階 cm	タブノキ	ケヤキ	シロダモ	ハゼノキ	カラスザンショウ	ミズキ	エノキ	計
5~9	2	1	6					9
10~14	9	3	21	1		1	2	37
15~19	6	6	11		1	1		26
20~24	13	6	3	19	5	5		51
25~29	9	9	4	4	8	5	3	42
30~34	13	22	3	4	10	4	10	66
35~39		1				1	1	3
40~44				2	1	1	1	5
45~49					1			1
50~54	1	2						3
55~59								0
60~64								0
65~69								0
70~74					1			1
本数計	53	50	48	31	27	18	17	244



注)直径は胸高であって、樹皮剥ぎ部位ではない。

図19 タイワンリスによる樹皮剥ぎ樹木の樹種別胸高直径階別本数

(5) 樹皮剥ぎによる植生環境への影響

当該地は照葉樹林帯に属し、自然植生はタブノキやスダジイなどの常緑広葉樹林である。樹皮剥ぎ調査の結果、落葉広葉樹では面的な樹皮剥ぎが多く、枯死が多い傾向が見られた。落葉樹のケヤキやエノキは当該地域の自然植生構成種であるため、これらの樹種については枯死の影響が懸念される。台湾リスの樹皮剥ぎによる自然植生への影響についての検討評価は今後の大きな課題である。

5) 農業・生活被害の状況

現地踏査、聞き取り調査によってタイワンリスの被害状況を把握した。表 8 に聞き取り情報を対象地区別に整理した。被害はタイワンリスが多く生息する逗子・葉山（Ⅰ地区）、衣笠・大楠山（Ⅱ地区）に集中しており、武山（Ⅲ地区）では、若干認められるようであった。定着個体がいないと推測される小網代（Ⅳ地区）、剣崎・岩堂山（Ⅴ地区）では、被害情報は得られていない。以下に被害の内容を種類別に示した。

(1) 柑橘類

全体を通じて多いのは柑橘類の被害で、種類を問わず食害されているようである。ただし、大半が自家用に植えられたもので、今回の聞き取りの中では、農業被害として正式に届けられたものはなかった。最も大きな被害と思われたのは、100 本程のウンシュウミカンのうち、3分の1が食害されたというものであった。ウンシュウミカンは果肉を全て食べるが、果実に種子のあるナツミカンでは芯部の種子を採食した後、果肉の半分を残して放置している事例が多く認められた(写真 5、写真 6)。種子を食べる目的で果実を加害しているようにも思われる。また、採食の対象になった木については最後の果実まで徹底して食べつくすという様子が見られた。

(2) その他の果実

カキ、ピワ、クリ、ギンナン、ヤマグリなどが挙げられたが、果実類はほとんどがタイワンリスの採食対象になるものと思われる。

(3) 畑作物

聞き取りでは、ダイコン、カブ、ハクサイ、ブロッコリー、キャベツの苗、キュウリという情報があったが、これらについてはヒヨドリ、ネズミ類の加害もあり、全てをタイワンリスと断定することは難しい。本調査中、ダイコンの首の部分およびハクサイ（ただし放棄されたもの）を齧る被害は確認された。絶対数として少ないためか、これらの被害もタイワンリスによる農業被害としては届けられていないようである(写真 7)。

(4) その他の被害

鳥除けの寒冷紗を齧る被害が挙げられたが、本調査期間中にはヒヨドリ除けの防鳥ネットを齧る被害が観察された。ネットはダイコンにかけられていたもので、あけた穴の部分でダイコンを齧っていた。

このほか、特殊な事例として、牛舎の牛の飼料を食べてしまうというものがあった。

庭木の被害情報もあったが、数は少なかった。予想された電線を齧る被害は本調査の中では聞かれなかった。同じく、給餌をする実態も本調査の範囲では見つからなかった。

全体として規模の大きな農業・生活被害は記録されなかった。

表 8 対象地区における農業・生活被害(聞き取りによる)

地区別	内容
I	<ul style="list-style-type: none"> ・被害は柑橘類から始まった。ユズ、アマナツ、ダイダイなどいずれも種子を食べる。 ・ユズ(10 数本)は若干出荷していたが、できなくなった。 ・キャベツの鳥除け用の寒冷紗を齧ってしまう。 ・植栽直後のキャベツの苗も齧る。 ・葉山町では庭の果実などの被害について、年間 20 件程度の相談があるが、農業被害は挙がってきていない。
II	<ul style="list-style-type: none"> ・ミカン、カキ、クリ、ダイダイなど、様々な果物に被害が発生している。 ・ウンシュウミカンの被害が 2005 年は 2 本だけだったが、2006 年は 1 週間で 100 本のうち、1/3 を食べられた。 ・ダイコン、カブ、ハクサイ、ブロッコリーも食べる。 ・ヤマグリ、カシの実、モチの実も食べている。 ・電線の齧り害は聞かない。
III	<ul style="list-style-type: none"> ・菜園のキュウリがやられた。
IV・V	<ul style="list-style-type: none"> ・リスがいるという話を 2~3 年前から年に数回聞くようになった。 ・三浦市ではこれまで被害の報告はない。

注)野菜類についてはネズミ類、鳥類による食害も考えられる。



樹上での被害



種を摂食した後は、果肉を残して放置



樹下に散乱した被害果実



ナツミカンの食害痕



種子を食べた後放置された果肉部



残された種子の皮

写真5 ナツミカンの被害状況



このタイプでも捕獲されたという



樹上に設置されたカゴワナ



中身は全部喰われている



樹下に食害されたミカンの皮が散乱している



散乱するミカンの皮



リスよけに残してある防虫シート

写真6 ウンシュウミカンの被害状況



かけられた網に穴を開け、ダイコンの首の部分齧る。



ダイコンを食害する際、齧り片が周囲に散乱するのが台湾リスの特徴



台湾リスのものと思われる放棄されたハクサイの齧り跡

写真7 台湾リスによるダイコンの被害・ネット被害など

6. まとめ

- 1) 本調査の結果、三浦半島のタイワンリスは鎌倉を基点に逗子・葉山（Ⅰ地区）、衣笠・大楠山（Ⅱ地区）と順に分布を広げ、近年、武山緑地（Ⅲ地区）に侵入した段階にある。三浦市の小網代、剣崎・岩堂山では過去に分布を認めた資料と本調査での聞き取り結果から、タイワンリスが一時的に出現することはあるようだが、定着はしていないと考えられる。
- 2) ラインセンサスの結果から、対象緑地のタイワンリス生息数を推定したところ、それぞれ1110頭（Ⅰ地区、12月）、1275頭（Ⅱ地区、12月）、55頭（Ⅲ地区、2-3月）となった。また生息密度はⅠ地区が1.02/ha、Ⅱ地区が1.33/ha、0.17/haであった。ただし、これらの値は限定された冬期間の調査結果から推定したものであり、さらに調査範囲も狭いことなどから、今後同種の調査を重ねて、精度を高める必要がある。
- 3) タイワンリスによる樹皮剥ぎの実態調査を実施したところ、Ⅰ地区では34.5本/km、Ⅱ地区では16.6本/kmの樹木に樹皮剥ぎがみられた。樹皮剥ぎはタブノキ、ケヤキ、シロダモ、ハゼノキ、カラスザンショウなどに多く認められた。また、樹皮剥ぎ対象樹種のタイプと樹皮剥ぎの形態に関係が見られ、落葉広葉樹には面的剥皮が多く見られ、常緑広葉樹の場合は線的剥皮の多いことが明らかにされた。枯死木は面的剥皮を受けた場合の方が多く、落葉広葉樹に多い様子が認められた。樹種タイプと剥皮タイプの違いが何によってもたらされるのかなどの要因解析は今後の課題である。
- 4) タイワンリスの農業・生活被害について現地調査と聞き取り調査によって確認したところ、自給用の柑橘類を中心に果実の被害が多く認められた。そのうち、出荷に影響したという事例はウンシュウミカンが100本のうちの3分の1、ユズ10数本の食害といった2事例だけであった。このほか、現地調査ではダイコンへの食害が認められた。また、鳥除けの寒冷紗、防鳥ネットを齧られるといった被害もあげられた。本調査の範囲では庭木を齧る被害情報は少なく、電線を齧る被害は聞かれなかった。被害状況の詳細把握は今後の課題である。